IAU の歴史

1．IAU が創立されるまで

第一次世界大戦は 1914 年 8 月に勃発し，ヨーロッパに特に大きな災害を与え，1918 年 11 月に休戦となった．IAU はその直後の 1919 年 7 月に創立された．その時ブリュッセルでは，IRC（ICSU —国際学術団体連合—の前身）の創立総会が開かれており，IAU が IUGG（測地学・地球物理学）などと共に，その傘下の国際団体として発足したのである．

IAU の設立前にも，天文関係の国際組織が活躍していた．1867 年に創立されたドイツ天文協会（AG）は，本来国際団体としての性格が強く，1868 年にはＡＧカタログ（星表）の計画を各国の天文台の協力のもとに開始し，また 1884 年には，現在も活動している天文電報中央局を設立した．それ以外でも，1904 年には太陽研究の連合が創立され，オランダの Kapteyn の提唱により，天の川の特定の場所を協力して観測する計画も，1906 年に始まっている．

また，測地学の国際組織もドイツ人が音頭をとって 1896 年に創立された．この様に，第一次世界大戦前の国際学士院連合はもとより自然科学の国際組織は，ドイツ人が主導権を握って運営されており，それら組織の多くは，第一次世界大戦中にはその活動を中止せざるをえなくなっていた．

戦争が終わりに近づいた頃，戦後の組織をどうするかという議論が始まり，そこではアメリカの Hale, Campbell をはじめ，天文学者が活躍した．戦争の主戦場になったフランスでは，特に反ドイツの気運が強く，代表として IRC の設立に力を尽くし，初代の会長になった数学者の Picard は，ドイツ人と席を供にしないと公言していたという．こうして，主として英米仏の科学者が討議し，旧国際学士院連合の自然科学関係の新組織として 1919 年に IRC が誕生したのであるが，それにはドイツ側の科学者はもちろん，中立国側の科学者の参加も当初は認められていない．IAU でも事情は同じであった．

2．IAU の発足．

IAU は定款を定め，会長に Baillaud（仏），総幹事 (General Secretary) に Fowler（英）を選ぶなどして，執行委員会を発足させた．そしてブリュッセルで 32 の常置委員会(Commission)をつくり，委員を選んで早速活動を開始している．設立時の 1919 年に IAU に参加したのは，ベルギー，カナダ，フランス，イギリス，ギリシャ，日本，アメリカという同盟国側の 7 ヶ国であり，それから直にイタリアとメキシコが加わった．

第一常置委員会は「相対論」で，Eddington（英）が委員長となったが，これは 2 期 6 年しか存続していない．その他の 30 余りの委員会のうちには，現在でも存続しているものも見受けられるが，6 つは最初の総会で廃止されている．学問的なもの以外でも「天文電報」，「述語・単位」，「暦の改良」といった委員会がつくられた．

その後，オランダなど旧中立国側から，同盟国側しか加入させないという方針に強い疑義が出された．1922 年に最初の総会が，83 人が参加してローマで IUGG と同時に開かれた時，5 つの同盟国側の国と，チェコスロバキア，デンマーク，オランダ，ノールウェー，スペインの旧中立国が加わり，加盟国は 19 になった．

ローマの第一回総会での主な議題は，常置委員会の 3 年間の活動の報告で，それに伴って上記の委員会の廃止も決まったのだが，会員の数は 207 人となった．この総会で Campbell（米）が会長に選ばれ，総幹事は留任し，副会長 5 人は改選されて，日本から当時の東京天文台長の平山信，旧中立国のオランダから de Sitter が就任した．

3．IAU の発展と第二次世界大戦．

その後 IAU も順調に発展し，1938 年にはストックホルムで第 6 回の総会が 285 人が出席して開かれた．ここで総幹事は Oort（オランダ）が留任し，Eddington が会長に選ばれた．ところが第二次世界大戦が始まると，中立を宣言したオランダがドイツ軍に

占領され，Oort はその職務を副会長である米国の Adams に委任している．そして，1944 年の 11 月に Eddington が亡くなり，執行委員会は副会長の経験のあるグリニジ天文台長の Spencer Jones を後任の会長に選んだ．

第二次世界大戦後の 1946 年 3 月，各国の代表も参加して，執行委員会がコペンハーゲンで開かれた．この時は日本は招待されていない．そして，1949 年にチューリッヒで総会が開かれた時，萩原雄祐（当時の東京天文台長）に招待状が出されたが，占領中の国情で出席出来なかった．次の 1952 年のローマ総会から日本の代表が出席するようになり，加盟の誘いを受けても拒んできたドイツが，IAU にやっと加った．

4．IAU の会員．

IAU は国（または地域）の会員と，個人会員から成り立っている．IRC が 1932 年，よりゆるやかな連合体の ICSU に改組されるまで，IRC の加盟国でなければ，IAU にも加盟出来なかった．1928 年にライデンで総会が開かれた時，会長の de Sitter の努力により，ドイツ側の天文学者にも招待状が出され，15 名ほどがそれに応じて総会に参加している．

第二次世界大戦までは，会員は加盟国の国内委員会の委員と，加盟国から常置委員会が選んだ委員ということになっていた．これが現在の姿になったのは，1948 年の改訂を経て，1952 年のローマの総会の決議によってであった．

この時から，国内委員会の委員は自動的に会員になるということではなくなり，国内委員会が推薦して IAU で承認された者と，常置委員会の委員が会員となることになった．常置委員会の委員は必ずしも加盟国の科学者でなくてもよくなり，会長もどこの国からでも会員候補者を推薦出来ることになった．

5．総会のあり方．

第一回をはじめ初期の総会の主な議題は，各常置委員会の報告であった．最近はこの報告は議題から消えているが，総会毎に出版される Reports on Astronomy にその名残をとどめている．これには，各委員会の研究分野での，三年間の成果がまとめられており，特にこれから研究者を目指す若い人達には役だってきたと思う．もちろん，委員会も総会毎に会合を持っていた．

この様な委員会を中心とした運営については，50 年前から批判があった．既に 1948 年のチューリッヒの総会から，複数の委員会にまたがる研究発表のセッションも開かれ，ミニシンポジウムといえる会合も総会中に組織されるようになった．現在盛んに行われている IAU シンポジウムの第一番目は，1953 年の総会にあわせて開かれ，その後総会とは独立にも開催されるようになった．しかし，それに伴って会員の総会離れが始まった．

第二次世界大戦前は，会員の 7 割ほどが総会に出席していた．しかし，日本からの出席は極めて困難で，戦後でも 1950 年代までは，3 人程度の日本学術会議代表が参加したにすぎなかった．IAU 総会の報告会は日本天文学会の年会でも行われ，多くの人達が世界の動向を知ろうと，熱心にそれに聞き入った．日本から出席者が増えたのは，1961 年のバークレー総会からであろう．

ところが，会員数が何千人になってからも，総会の出席者が 2,000 人を越えたことがない．会員の総会への出席率を向上させるための方策は，執行委員会でも度々議論された．総会では，限られた人しか関心を持たない委員会の会務のための会が多いという批判に対処し，また研究発表のセッションの質を向上させようとして採用した策が，委員会の枠を越えた Joint Discourse の拡充であり，前回からの総会会期中でのシンポジウムである．ポスター・セッションも当然これと同時に開かれている．京都総会でのこれらの題目も，今ごろは執行委員会で決っているであろう．

委員会の組織の改組も試みられ，大小 40 もある委員会を，11 の Division と呼ばれるグループに組み込み，より沢山の天文学者達の関心を引き付けるような試みも，実行されている．

古在由秀